

私が専門の文化人類学では「民族」はいないという考えがあります。そうすると、日本人がここにいると反論したくなると思います。民族は、同地域に住み、同じ言語を話し、同じ歴史を経験し、同じ価値観や気持ちを持つ、昔から連綿と続く集団だと一般的に考えられています。しかしこの考え方は現在否定されています。

例えば、「日本」という意識が一般的に広がったのは明治以降と言われています。そうすると、「日本人」はここ150年ぐらいの存在となります。みなさんは飛鳥時代からと思うかもしれませんが、当時、日本語という共通の言葉は今の日本を覆ってはいませんでした。今の時代でも、同じ言語を話すからと言って、同じ価値観や気持ちを持つのは難しいですね。世代や階層、住む地域で違います。共通語は苦手で方言ばかりの人もあります。

むしろ、今は「民族」は人を「同じ仲間と思わせる」範ちゅうと考えられています。普段は「日本人」を意識していません。例えば、普段ご飯を食べる時に「日本人だ」と思って食べていません。しかし、ワールドカップの試合の時、外国に行った時、国際政治でもめたとき、「日本人」を意識し、その意識を持たせるわけです。

範ちゅうがゆえに曖昧なところが出てきます。日系ブラジル人はある時に日本人とされたり、もう「日本人」でもないともされます。外国の人でも王貞治さん(中華民国籍)は「日本人」とも思われています。本人の思いも大事ですが、周囲がどう見るかも関係します。状況に応じて都合よく、「民族」は使われるわけです。違いのある人々をひとつにまとめあげる。それが「民族」が持つ不思議な力だと私は思っています。

文：県立広島大学 上水流久彦 講師

2014(平成26)年 広報あきたかた 11月号掲載